令和４年度
第１回
総合教育会議議事録

日時　令和４年８月 17 日（水）午後１時 30 分～

場所　いわき市体験型経済教育施設Elem(エリム)

第１回総合教育会議　議事録

１　日 時　令和４年８月17日（水）　午後１時30分～午後３時30分

２　場 所　いわき市体験型経済教育施設Elem(エリム)

３　出席者　いわき市長　　内田　広之
　　いわき市教育委員会　教育長職務代理者　　馬目　順一
　　いわき市教育委員会　委　員　　根本　紀太郎
　　いわき市教育委員会　委　員　　宮澤　美智子
　　いわき市教育委員会　委　員　　小峰　美保子

４　内 容　講演・ディスカッション
　　（講演テーマ）戸田市の教育改革の取組みについて
　　（講　　師）埼玉県戸田市教育委員会　教育長　戸ヶ崎　勤　氏

【会議内容】

１　開会

２　議事

会議設置要綱第４条の規定により、市長が議長となること、また、同要綱第７条第２項の規定による第１回会議の議事録への署名は、馬目教育長職務代理者及び根本委員が行うことを確認した。

①会議概要の説明

【内田市長】

・いわき市では人づくり日本一、そして学力日本一に向けて、今年度から学力向上チームを教育委員会の中に設置している。戸田市の先進事例を参考に、主に国の全国学力学習状況調査の結果を、エビデンスに基づきながら分析し、各学校が学習状況などを客観的に把握できるような学校カルテを参考で作成し、学力向上策として、学校の課題への対応策を助言するといった取り組みを進めている。
・今年度の総合教育会議では、学力の向上をテーマとし、議論を深めたいと考えている。
・ついては、先進事例として早くから先進的な教育改革を取り組んでいる戸ケ崎勤教育長にオンラインで参加いただき、講演をいただきたいと思っている。
・その後は、戸ケ崎教育長を交えながら、皆さんからご意見をいただきたいと考えている。
・戸ケ崎教育長の経歴としては、「戸田市の小中学校の校長先生や、県の指導主事な

どを経験され、国の様々な審議会などでも活躍されている。
・それでは、戸ケ崎教育長から60分間ご講演を賜りたい。どうかよろしくお願い申し上げる。

3　講演・ディスカッション
①　講演
【戸ヶ崎教育長】
※　「戸田市の教育改革について」の資料を基に講話を頂く。
（主な内容は以下のとおり）

・今日このような機会をいただいたことを大変光栄に思う。
・これまで、いわき市の教育委員会と、本市の教育委員会が何度か連携の打ち合わせ等の機会を持たせていただいたが、今日このような機会を通して、改めて本市教育委員会と、いわき市教育委員会との連携を今後も進めていければと思う。
・埼玉県戸田市は、池袋まで15分、新宿まで20分という交通至便で、平均年齢は41.7歳と、全国的に少子高齢化の中にあって、子供の数が増えており、全国的にも珍しいと思う。
・一方で急増しているため、教室不足の状況になっていて、戸田市の状況として設備などのハード面にお金がかかってしまい、なかなかソフト面での教育投資というのができにくい状況にはなっている。
・特色としては、戸田市SEEPプロジェクトを、学力向上を中心にしながら取り組んでいる。
・「SEEP」というのは、Subject、EBPM、EdTech、PBLという、四つの言葉の頭文字を取ったもので、「SEEP」自体の英語の意味としては「浸透する」という意味。教育の業界用語ではあまり聞きなれないが、薫習という言葉がある。
・知らず知らずに香り・匂いが体に染みついていくという意味であるが、そういった言葉をイメージして、ＳＥＥＰプロジェクトと呼び、改革の中枢に据えてやっている。
・戸田市の状況として、埼玉「都民」というのが非常に多い状況。
・10年程前の戸田市は、学力は今ほど高くなく、体力も低いという状況。
・現在は、学力については、県内でもほぼトップクラスになってきている。
・非行問題については、表面的には学校の中で騒ぐ等のことはほとんどなくなってきている。
・一方体力や不登校の問題については、まだまだ課題として目の前にある。
・以前は、戸田市を希望する教職員があまりいなかった。
・現在は、希望する職員というのは、埼玉県の南部管内でも多い方にはなってきている。
・さらに管理職については、市の職員の中からも、新たな管理職のなり手が育ってきており、人事上のものについても、比較的上手く回転が始まっているかなと思っている。
・授業の方は、教師主導型の授業が多く、ICTも無縁の状況だった。
・このような中、学力の問題と非行問題を改善するということで、２大命令を受けて着任した。
・当時は、ICTがなくても何も困っていない状況で、基本理念として、県内では盛んに、決して流行に流されることなく、不易の教育を大事にして、足元をしっかりと固めて、凡事徹底を遂行し、平凡の中に価値を見つけようという感じのものが掲げられていた学校もあった。
・これは、結局何も変えない、変わらないということにも、意味が取れなくなく、そういう学校に、例えば民間が入ってくるということになったら牙城が崩れる

ので、やるべきではないという文化があった。
・教育長を拝命し、議場でどういうことをこれからやっていきたいかということで申し上げたのは、一つ目は AI での代替は難しい力を育成し、21 世紀・汎用的・非認知スキルを育成するということ。
・二つ目は、土地柄、地域に根ざした教育が難しいという部分があるため、産官学と積極的に連携した教育をやりたいということ。
・三つ目が EBPM。教育は経験・勘・気合という 3K ではなく、もっと客観的な根拠に基づいたものへシフトしていかなくてはならないのではないかという思いが非常に強く、エピソードベースからエビデンスベースへの改革をしたいと申し上げた。
・ただ、自分が言っていることと現場でやっていることの乖離があってはいけないということで、エビデンスベースから Evidence Informed（参照する）へ、そして現在は EIPP（Evidence Informed Policy &Practice)、つまり実践を重視し、なおかつエビデンスも参照していくという言葉を使い始めている。
・四つ目が授業や生徒指導を科学するということ。
・優れた教師の経験や勘など、教師の匠の技を言語化・可視化・定量化するなどし、暗黙知を形式知に転換していきたいという思いがあった。
・教育委員会が考えているコンセプト等について、教育委員会だけでやろうと思ってもできるわけではないので、学校現場にいかに落とし込んで、腹落ちしてもらうかということは非常に重要であり、学校に理解してもらう必要がある。
・そのときに何から着手していったらよいかと考えたものが３つある。
・１つ目は生徒指導の王道で、学力を上げることである。
・わかる授業・楽しい授業を展開していれば、子どもたちはおのずから教室の中にとどまるため、面白い授業をどんどん展開して学力をつけていこうとした。
・２つ目は校長のリーダーシップである。
・校長の意識が変わっていけば、学校も変わっていくということで、校長会で意識変革を起こすためにいろいろな話をしてきた。
・当時は反発もあったが、「学校間ピアレビュー」というものも始めた。
・これは、専門家会議、集団会議というもので、成功談だけではなく、失敗談なども含め、積極的に共有してほしいということで、校長会も教頭会も、現在もその取り組みを行っている。
・３つ目は、授業改善に向けてということで、授業改善日を市内統一で作った。
・さらに、素人から見てもわかる授業改善に努めてもらうようにした。
・また、学習指導要領の改訂の中の一つのキーワードである「社会に開かれた教育課程」をもとに、変化する社会の動きを教室の中に入れるという言葉も、先生方に子どもが出ていく社会を知ろうとしてもらうため、力を込めて言ってきた。
・子どもが出ていく社会に対して、先生方がビジョンを持つことが非常に重要である。
・新しいものは危険と捉えがちなので、学校はリスキーなものを避け、守りに入ってしまうこともあるが、凡庸な 90 点の取り組みよりも 60 点でもいいから夢のある取り組みをしてほしいということを言い続けてきた。
・このことがだんだん浸透し、現在は教育委員会が働きかけなくても、かなり自走するようにはなってきていると思う。
・「橋を作ること」を題材に、子どもたちが専門家の意見も聞きながら、試行錯誤を繰り返して成功して喜びを共有するという動画を学校と共有し、「戸田市では、こういう教育を目指していきたい」というビジョンが、だんだんと現場にも腹落ちしていけたと思う。
・クラス 35 人いる中で、発達障害の子や特異な才能の子、不登校の子、家庭的に恵まれていない子などがいるということを前提にした教育を実践していかなけ

ればならないことを見据えて、先生方に日々の授業改善等に努めてほしいというような話をして、学校の中でも校内研修等で共有化している。
・これらを受け、今後戸田市の未来の教室に向けて、どう変わっていくべきかということで、キーワードとして、「脱正解」、「脱自前」、「脱予定調和」という三つの脱を、学校と共有してきた。
・学力の徹底した個別化、デジタル化、併せて課題発見解決力ということで、プロジェクト型の学びを推進していこうと考えた。
・さらに、形式的な平等主義ではなく、公正主義をもとに、様々な理由で取り残されている子供たちに対してピンポイントでプッシュ型の支援をしていくことが必要であると考えている。
・日本の教育には 150 年で培った良さがあり、全人的な教育などを維持しながらも、変えるべきところはしっかりと変えていくことも大事にしていかなければならない。
・産官学との連携では、多くの機関と様々な連携をしているが、予算がかかっていないということが特色として挙げられる。
・双方にとってプラスとなる共同研究の関係を築いていくため、企業と何をやるか互いに共有化できるようなロジックモデルを作ったり、企業の持っているノウハウだけをもらうということでなくて、何を自分たちが求めているかという、本市ならではの教育意思を相手にしっかりと伝えていったりということをやっている。
・そのため、数多く、去った企業はあるが、現在は 70 機関程度と連携をしている。
・変化する社会の動きを教室の中に入れるため、外部人材の活用も行っている。
・また、一つの自走のパターンとして、新たな学び等の原材料・人材は教育委員会において用意するが、そういった方々のマネジメントは学校主体で取り組んでもらうようにしている。
・ICT では、一貫して、手段が目的化しないように、何のために使うのかということを明確にして取り組んでいる。
・Pedagogy First, Community Second, Technology Third といった学習の肝を明確にしていこうということ。
・それから、往々にして若手は積極的に活用していくが、ベテランは消極的な利用にとどまるといったことがあるが、本市では、指導力のある教師から ICT をどんどん活用してもらうことを意識している。
・また、わからなければアドバイザーに聞くのではなく、子どもに積極的に聞いてもらうようにしている。
・子どもが先生に教えた経験が 1 回でもあれば、大いに自信がつく。
・今はデジタルネイティブの子どもたちが多いので、使い方そのものは、子どもたちに聞いてもらうようにしている。
・今はプリント学習からの離脱というのを積極的にやっている。
・小学校はほぼ離脱し始めているが、中学校ではまだ一部プリント学習が行われている実態もある。
・少しずつシフトしてはいるので、長い目で見届けるようにしている。
・デジタル教科書も当たり前のように全部の学校が活用している。
・GIGA スクール構想も第 2 フェーズに入っていると考えており、家庭学習とのシームレスな学びにも取り組んでいる。
・学校と家庭とのやりとりも、クラウド化し、電話や連絡帳の対応に時間がとられることもなくなってきており、教員の働き方改革にも貢献している。
・ICT について、今までは危ないから使わせないという感じもあったが、使いながら自分たちで学んでいくようなデジタルシチズンシップ教育はだんだんと浸透してきていると思っている。
・今、力を入れ始めているのが、メディアリテラシー教育で、子どもたちにロジ

カルシンキングやクリティカルシンキングを身につけてもらえるよう、教員研修までは取り組めており、これから子どもたちを指導していく段階。
・STEAM 教育の基盤作りに向け、インテル社に、4K 対応のディスプレイや最新の CAD、3D プリンターなどが使える部屋を作っていただき、子どもたちが様々に学べるようにしている。
・特に義務教育の段階は、いかにして本物や一流に触れるか、最先端に触れるかということが、知的好奇心を育成するという意味で非常に重要ではないかと考えており、教師自らも、その道のプロとの出会いや大物や一流に触れる必要があると考え、意図的に産官学と連携しながら、そういう機会を作るようにしている。
・社会に対する 18 歳の意識調査では、「自分で国や社会を変えられると思う」などの割合が日本人はかなり低く、どうにかするため、本市でも PBL の学びを始めた。
・今年で 6 回目になるが、プレゼンテーション大会を始めて、年々子どもたちのスキルもアップし始めている。
・学級作り・学校学級経営の中に、ポジティブな行動支援（PBS）の手法を取り入れ、できないことに目を向けるのではなく、できることに着目したり、望ましい行動を称賛したり、承認の機会を増やしたりする取り組みが、自己肯定感にも結びついてきていると思う。
・データ利活用を推進し、全国学力状況調査や埼玉県独自の学力状況調査、国立情報研究所の新井紀子先生のリーディングスキルなど、産官学の連携をしながら、総合的に構築していくということを、この 5 年間ほど集中的に実践している。
・慶應義塾大学の中室牧子先生らとともに非認知能力に関する共同研究を行い、優れた教員が子どもたちの力を伸ばすために、どういう手法で行っているのかを知るために、調査を行ってきており、その結果を基にして、アクティブラーニングのための授業改善モデルを作るなどの取組みも行っている。
・もう一つ、様々な分野の専門家の方に参加いただいている、アドバイザリーボードも含めた教育政策シンクタンクも作ったところである。
・現在の方向性としては、授業を科学する・生徒指導を科学する・学校経営を科学するという 3 点に重点を置き、取り組んでいる。
・授業を科学する部分では、先生方の経験や勘に基づいていたものを、データに基づく教育に転換する取組みを行っている。
・生徒指導を科学するという視点では、これまで先生や保護者の方の気づきに頼らざるを得なかったものを、子どもたちの SOS をデータで早期発見できるような取り組みを始めている。
・学校経営を科学する部分では、学校カルテやデータを利活用して、先生方を指導するような取り組みも行っている。
・誰一人取り残されない教育の実現に向け、オルタナティブプランということで、不登校を支援するサポートルームを実証的に設置することや、埼玉県教育委員会と連携して、高校の中に中学生の不登校生徒の支援教室を作ってもらい、高校生を間近に見て、進学のモチベーションを高め、不登校解消のきっかけにすること、NPO と連携し、メタバースを活用し、オンライン上での教育相談を行うこと、不登校への理解促進のため、シンポジウムを開催することなどに取り組んでいる。
・ご清聴に感謝。

②ディスカッション
【内田市長】
・大変貴重なお話をいただき、感謝申し上げる。

・時代を先取りし、教育委員会や学校だけの力では限界があるようなことも、外の力を巻き込んで取り組んでいくことの素晴らしさを実感した。
・今日は、いわき市の教育委員にも参加いただいていることから、委員の皆様からご意見をいただきながら、戸ヶ崎教育長からアドバイスをいただければと思う。

【馬目教育長職務代理者】
・教育長のお話を聞いて、生き抜く力を生徒にもってもらいたいというのを一番感じた。
・学力の向上に向けては、学ぶ楽しさが生徒の体に染みついていけば、生徒の自信になると考えており、そうするためには、先生の教える力は非常に重要で、いろいろなツールを使って学校の授業を進めていければということも感じた。

【戸ヶ崎教育長】
・学力の向上には学ぶ楽しさが大事ではないかという意見はその通りだと思う。
・本市では、小学校４年から中学校３年生の全児童・生徒を対象に、授業がわかるか・楽しいかという調査を、市独自に年に２回行っており、クラウド上で集計し、データを把握している。
・子どもたちが知的好奇心を持てば、先生に言われなくとも、どんどん学ぶようになるため、教員にもいかに子どもたちの心に火をつけていくかが大事ということを常々伝えている。

【馬目教育長職務代理者】
・デジタル化が進んでいる中で、先生と生徒の交流・遊ぶ時間というのも必要ではないかと考えるが、教育長のご意見をお伺いしたい。

【戸ヶ崎教育長】
・大事なことは、人間と人間との触れ合いなどの、リアルで体験できるものは他には代えがたいものであるので、リアルとデジタルのバランスをいかに保つかということである。
・AI が進化しても、教師の仕事はなくならないと世界中で言われている。
・本市でも、働き方改革の一番重要な柱として、先生と子どもの触れ合いの時間をたくさん取ろうということをメインとして取り組んでいる。

【根本委員】
・いろいろな事情の子どもがいる時代になったと感じており、その中で誰一人取り残されない教育が重要であると考えているが、自己肯定感・自分を認めるということが根底にあるものとして大切だと考えている。
・自己肯定感を高めるには、様々なアプローチがあると思うが、ふるさとを知るということも大切だと思う。
・戸田市は地域に根ざした教育ができないため、産官学の力を借りて取り組んでいると伺ったが、いずれはこんなところに目を向けてやっていきたいということなどがあれば、教えていただければと思う。
・また、心の豊かさということを考えると、芸術に触れることも大切だと思うが、それに関して取り組んでいることがあれば教えていただきたい。

【戸ヶ崎教育長】
・戸田市は子育て世代がどんどん入ってくるが、子育てが一旦終わるとまた出ていってしまうという実態もあり、子育てが終わってもずっと住み続けるというサイクルができていないというのが課題としてある。

・そのような中で、地域に根ざした教育・地域を愛する教育は非常に重要だと思っており、その一つの手段としてコミュニティスクールを肝入りで始めた。
・全校で開始して４年目になるが、地域の方々も産官学の連携を持っている方がたくさんいらっしゃることを活かし、産学官連携を活かす都市型コミュニティスクールとして取り組んでいる。
・一方で、子育て世代が子育てが終わると出ていってしまうことや、子どもたちが成長して出ていってしまうことにどう歯止めをかけるかということを重要視する方も多いが、世界に羽ばたき、世界から地元に注目するような人財をどんどん育てていくことも大事だとコミュニティスクールの中での話で感じた。
・芸術の部分であるが、STEAM 教育の A はまさにアートということで、図工・技術・音楽も様々なテクノロジーを使って授業を行っている。
・戸田市は音楽が大好きであるということが特徴的で、全小中学校に吹奏楽部があり、コロナ禍前は合同音楽祭で非常に盛り上がっていた。
・子どもの美術展なども盛んに行っている。
・芸術についても大事にして、力を入れていきたいと考えている。

【宮澤委員】
・資料で、国や社会に関心がない、世の中への希望や未来ががないという若者の現状を見て、主体性が欠けていると感じて、ショックを受けた。
・これは、幼少期からのあり方・教育的環境や、子どもたちが世の中の社会的な環境・施設・人財に触れる機会が少ないというのが要因で、大人の責任かなと思って拝見した。
・ある分野で得意な子が、できない子に声をかけるということが重要だと考えており、そのあたりで戸田市では先生方は授業でどのような声掛けを、子どもたちを見ながらしているのか教えていただきたい。

【戸ヶ﨑教育長】
・自分の学びを定着させるには、人に教えるということが非常に重要であるといのは、科学的な知見で一定のエビデンスが出ている。
・授業の中でも、お互いの学びの時間・学び合いの時間というのをセッティングして取り組んでおり、教師に対しても子どもの学び合いをいかに活性化させるかという研修を定期的に取り入れてやっていくことが必要である。
・おっしゃられた視点は非常に重要な視点であるので、本市でも力を入れているところである。

【宮澤委員】
・感想として、物心両面、子どもに享受する何かを持ってる先生たちが授業をしたとき、授業の最初に子どもと教員が共通の目的とゴールを言語化し、明確に自覚する大切さということが資料の中にあって、私は本当にそうだなと思い、そのあたりで先生のデータを拝見させていただけたことに感謝申し上げる。
・デジタルシチズンシップ教育に関して、まだまだ保護者の中にはスマホがダメという親も多い。
・その保護者・家庭・市民に対して、どのように対応したらよいのか、いいアドバイスがあればいただきたい。

【戸ヶ﨑教育長】
・戸田市では、小学生で７・８割、中学生で９割を超えるスマホ保有率であり、そのような状況でデジタルネイティブの子どもたちがデジタルを学んでいるスピード・深さというものは、大人の想像をはるかに超えているという認識を、大人は持つ必要があると思う。

・大人が何かセーブしたとしても、それを超えるような次の一手を今の子どもたちは考えると思うので、自分たちを超えていくんだという視点を持ち、任せられるものは任せるようにした方がよい。
・ただ、犯罪や人に迷惑をかけるようなものなど、絶対にやってはいけないことは具体例をもとに会話していくことが大事。
・一定の距離間を持ちながら、心だけはつながり、何か悩んでいることはないかということを見届けるようにしていかないといけない。

【宮澤委員】
・先ほどの講演で、教員の方から子どもに聞くということがあったが、それは子どもを愛して信じているということだと思うので、私も保護者としていろいろなことを聞いたり、寄り添ったりしていきたいと思う。

【戸ヶ崎教育長】
・子どもに聞くというのは大事で、子どもの気づきにもつながることから、親子の会話の中で、子どもにどんどんデジタルについて質問していくことは重要かもしれない。

【小峰委員】
・教育課題を子ども目線に立って捉えるということ、新しいものだけでなく、今までの学校教育の蓄積も大事にするということ、学校・家庭・地域が一体になることがこれからの教育改革に結びついていくということが心に残った。
・産官学の連携であまりお金がかかっていないという教育長からのお話があったが、戸田市全体の予算のうち教育に占められる割合はどのくらいなのか伺いたい。
・また、教師の経験や勘、匠の指導技術を共有化し、形式知にすることは大事だと思うが、データを集めたり、作成したりすることに相当なエネルギーを使ってしまい、それをうまく活用できない部分もあるかと思うが、教育長はどういったところに重点を置いて取り組んで来られたかも伺いたい。

【戸ヶ崎教育長】
・割合としては、11%くらいだと思うが、それも校舎の建て替えや建築などにお金がかかっている状況。
・市長とは税金だけではなく、自分たちで教育にかける費用をねん出するような仕組みをつくらなければならないという考え方を共有しており、クラウドファンディングにも挑戦している。
・産官学の取組みで予算があまりかかっていないという話をしたが、それができている理由として４つある。
・一つ目は、自分たちは教育委員会・学校として何をやりたいのか、しっかりとした意思をもって連携するという心の共同者になるというもの。
・二つ目は、少しでも効果検証できる基盤を作っているということ。
・三つ目が、クラスを実証の場として提供して、産業界などに入ってもらって、出てきた成果はどんどん還元してもらうということ。
・四つ目は、積極的な情報発信で、企業としても学校が情報発信してくれるというのはありがたいという仕組みがあること。
・データの利活用については、教育委員会が、連携企業の方や博士課程でインターンシップに来ている学生などの産官学の力を使ってデータ収集・分析をしているため、学校には負担はないようになっている。
・学校には、データから様々なものを見出すデータリテラシーの力はつけてほしいということは言っている。

【内田市長】
・数々の取組みをパッケージとして取り組んでいるように拝見し、教育委員会事務局や各学校長、教頭先生も含めて、ボトムアップで政策を作っていくような雰囲気を教育長としてどういう風に火をつけられたか伺いたい。
・また、やる気のあるスタッフが教育委員会に来ていると思うが、その人事上の工夫などのヒントをいただきたい。

【戸ヶ崎教育長】
・現在は、ほとんど直接指示は出していないが、私から校長会のたびに最新の教育情報などの共有を図っていたところ、校長からはそういったことが起爆剤となり、自分たちでどうにかしなくてはならないという気持ちになったという意見を聞くことができた。
・様々な情報を共有することによって、学校から主体的に動いていってもらうようにしている。
・一律に「変わりなさい、こういうふうにやるように」ということで強引に引っ張っていくやり方は続かないのではないかと思う。
・それぞれの学校の良さを少しでも褒めてあげるなどして、校長や教員にモチベーションをいかに高く持たせて、長続きさせるかが大事だと思う。

【内田市長】
・貴重なご意見をいただき、感謝申し上げる。
・今日のやり取りを参考にさせていただきながら、いわき市も頑張っていきたいと思うので、今後とも是非連携させていただければと思う。

3　閉会

【署名】　馬目順一

根本紀太郎